日本における S. スマイルズ『自助論』受容の思想史的研究（Ⅳ）

——鶴田賢次『スマイルス*翁自伝』との関係を中心に——

藤　原　　暹

承　前

本稿（Ⅰ），（Ⅱ），（Ⅲ）において S．スマイルス『セルフヘルプ』（自助論）が日本人に如何に思想化されたかについて，特にその翻訳から考察してきた。この間にも何度か引用もし，『自助論』の理解に参照したものに，鶴田賢次『スマイルス翁自伝』があった。この明治41年に抄訳された作品は，その後のスマイルス理解や『自助論』理解に多大の貢献をしたのであった。また今日もなお「原著とくらべてみても，重要なところはほとんど省略されていない。好著といってよいであろう」[1] という評価もあるのである。

ところで，鶴田の抄訳本を読むと，文章は少なくとも四種類ある。

1）原文からの訳文

2）原文を翻案した訳者鶴田の文章

3）訳者の感想

4）その他，例えば原文中にある詩文を漢詩型に訳すが加きもの

原文の抄訳というけれども，かなり鶴田自身の主観的な原文操作や解釈がなされていることが予想されるのである。しかも訳本第一章は「自伝」となっていて，スマイルスとこの「伝記」についての関係に鶴田が共感を持って叙述したものなのである。してみると，この抄訳本自体が一つの思想史的作品とも考えられるのである。そこでまず原文と対照してみて原文自体が如何なるものであったのか？それを鶴田は如何に受止め取捨選択したのか？更にはそのような鶴田の営為は思想史的にいって如何なる意味を投かけるのか？などについて考察し，そのことが『自助論』受容上にどんな問題点を投かけるのかを考えてみたいと思う。

1）『西国立志編』講談社学術文庫　昭和56年　渡部昇一氏解説550p. なお，スマイルスの好解説として読まれてきた柳田泉氏のもの（冨山房百科文庫18『西国立志編』解説　昭和13年）も鶴田著に負うところがあるようである。

* Smiles は中村訳では斯邁爾斯であり，スマイルスと読まれてきた。本稿はそれを考慮しスマイルスと文中使用した。

1. 鶴田賢次抄訳『スマイルス翁自伝』と The Autobiography of Sumuel Smiles, edited by Thomas Mackay

いくつかあるスマイルスの伝記の中で，Thomas Mackay 編『スマイルス伝』(London John Murray 1909)[2] が鶴田の原文であることは，両書の幾つかの部分をとりだして対照してみるとわかる。一つは彼の父が死んで医学勉強を断念するかどうか迷う部分，いま一つは，『セルフヘルプ』執筆の直接の動機となったリーズ市の青年達の講演依頼の部分をとりあげて比較してみる。

A） After remaining at home for some time, I professed my willingness to abandon my profession. But my mother would not hear of it. "No, no," she said, "you must go back to Edinburgh, and do as your father desired: God will provide." She had the most perfect faith in Providence, and believed that if she did her duty she would be supported to the end. She had wonderful pluck, and abundant commonsense. Her character seemed to develop with the calls made upon her. Difficulties only brought out the essence of her nature. I could not fail to be influenced by so good a mother. I was inspired by her, and obeyed her.[3]

A）に対する訳文

サテ，自分は，全く医業を打すてて了はうと決したから，母にさうしても苦しくないことを明らかにしたところが，母は聞きいれないでいわれたのに，「イイエ，イイエ，ソレはイケない。ドウしても，カウしても，大学へ戻って修業しなさい。コレが曾てよりの父上が願い，御前はその通りになさい。天帝が宜いようにして下さるだろう（God will provide)」と。こんなことを申されたのは，その理由があったので，母は元来，ヨコなく天帝を信仰しておられた人なので，この際，その加護の下に立ちながら，自身が，一心不乱になって，母親たるものの職分を尽くすならば，全家を支持することはできるに違いないと固く思い込んでおられたのである。また母は元来すこぶる活発勇敢な，しかも豊カに常識を具えておられた人でもあるが，なホなホ多くその腕前の必用を感じた一家今日の状況は，その本性を四方にまばゆく発揮させた。大キな困難も，多くの辛苦も，却つて益々その品性の枠を絞り出させるばかりなのであった。かような親の側にあっては，たれカ，風化されずにおられよう，自分は，実に母の霊感（インスピレーション）をこうむった，一も二もなく母の意に従ったのである[4]。

---

2) 大英博物館（British Museum）所蔵本を使用した。なお，マイクロフイルム収集に際し，ロンドン滞在中の岡田仁氏を煩わした。謝意を表する。

3) 上記原本 44p.

4) 博文館発行本 明治41年12月29日 29～30p.

B） In March 1845, I was waited upon by a deputation of young men, who requested me to give them a lecture, or at all events "to talk to them a bit," at the Mutual Improvement Society which they had established in what had before been a Cholera Hospital, in St Peter's Square, Leeds. I complied with their request, and delivered an address which was afterwards published under the title of *The Education of the Working Classes.*[5)]

B）に対する訳文

レーヅ市のある青年共が一団をなして，相互改良会といふのを組織していたが彼等は遂に「シント　ピータース　スクエア」に在ったコレラ病院の旧跡を借受，夜間，そこに集って，勉学するようにした。45年の三月，彼等は，数名の委員を選んで，余を訪問せしめ，余が講演を需めた。一彼等の言葉通りにいえば，「チョビリとした御話でも聞かせてくださりませ」と，申し込んできた。余は彼等の需めに応じ，一場の演説をしてやったが，後に『労役者ノ教育』と題して，これを出版した[6)]。

これら，A）B）とそれぞれの訳文をみると明らかに一致している。

では，T. Mackay 編『自伝』（以下略記する）と鶴田訳との比較をしていく。

まず『自伝』の中で鶴田はどの部分を抜粋し，訳しているであろうか。次の表はそれを示したものである。

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100,

101, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 200,

201, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 300,

301, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 400,

5）上記原本　131p.
6）上記抄訳本　110p.

401, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47,

（表中の数字は原典文のページを示し，下線部分は鶴田の訳した部分である。）

原典は本文が417ページあり，それにINDEXが30ページある。その本文中，鶴田は五分の一程度を訳していて，ほとんどの分量が残されたままである。しかもp. 66～81やp. 90～125というように纏まった部分がカットされているのである。こうした部分には抄訳とはいえ取上げるべき内容がなかったのであろうか。

勿論，抄訳本中に鶴田は少なくとも11カ所にわたって，省略した理由を述べている。例えば，

49～50p「（スマイルスが新聞編集人となると）自然，その地方の政治運動にも加入しなければなるまい。自伝にはソレを細細と述べている。若しそれをここにも述べようとすれば，勢い，その時代，その地方の風潮からして，天下の名士「コブデン」の如き人と往復した書簡にまでも，説き及ぼさなければなるまいが，しかし，ソレは，この抄録を余りに長たらしくさせるのみならず，ソレがここに抜粋しておく程，必要なものとも思われむで，今は悉くソレを省略してしまい……」といっている。

たしかに，多くの手紙が掲載されていて，それはそれで重要な史料であるが，訳すと，あまりにも長文になるのでカットしたことは分る。しかし，その時代その風潮を全くカットしているのである。このことはスマイルス自身が既に指摘してきたごとく[7]，多分に歴史的関心を持って事象を観察していた人物であったことを考えると，問題があるように思えるのである。

そこで鶴田のカットした部分には如何なる記事（スマイルスの観察や主張）があるのか調べてみることにする。

1～7pについて，ここはBoyhood and Educationという章であるが，Then came the battle of Leipzig. The retreat of Napoleon upon France, the siege and surrender of Paris.…… Then followed Waterloo. に対して，スマイルス自身が，It seems to me like a dream to remenber the rejoicings on that occasion.…… such things make a deep impresion on the imagination of a child と述べて，ナポレオンの敗北とウエリントンの勝利に対して感動しているのである。また，5p One of the things that struke me very much in my early years was the illness of my elder

7）例えば，本稿（I）Artes Liberales 31 p. 13 あたりで，現時代における発明発見も数百年のIdeaのHistoryの結果だといい，またそれが社会的要請と深い関わりにおいて日の目を見ることを述べている。

brother John と述べ兄のジョンの病気について，如何に心配したか，またそれに続いて，Dr. John Welsh and Mrs. Welsh への感謝の気持などが目につく。

16～25p は Youthfull Recollection についての章であるが，その中に When a boy, I was taken by my father to see the parliament house at Edinburgh. という記事，King Gorge in August 1822, I went up to the Garlenton Hills to see. とか又，My Grandfather's Death などがある。

次に 26～35p は鶴田がかなり引用している所であるが，それでも目につくカットがある。28p I remenber going with my father, when he has on the watch, to take the first turn with him round the churchyard. とか又 Samuel Brown had set forty seven excellent libraries in circulatory motion through the country; and ther was scarcely an in habitant who was not within a mile and a half from one of these institutions. As Haddinton was the center of the movement. さらには，Sumuel Brown was the native of my own countly. などである。

次に，36～41p は Reform–The Lauder Raid–The Cholera という章である。ここの記事は About this time "Reform" was in air. The three days at Paris in July 1830 had wakened up Europe, and excited a general desire for change. で始まり，フランスの七月革命（1830）がヨーロッパ諸国，特にイギリスに及んでいく様子を述べている。選挙法改正案の提出を求める Mob の姿をスマイルスは丹念に観察しているのである。例えば，During the Reform era every boy was a reformer. To please the boys and the people generally, and perhaps to show the general enthusiasm, an extempore band was got up and headed the procession. そして，The first election under the Reform Act を述べて，To return to my own personal history, と記しているのである。スマイルス自身，如何に社会的政治的現象が目に焼きついて離れなかったか分るのである。

さて，42～43p で気になるのは Asiatic cholera was now travelling north-west wards through Europe, in the direction of England. 以下の記事である。彼の父がそれで死亡するわけであるが，ここでは Cholera was very deadly in the town at that time. Many died in the front street, near where my father lived. The cause of the fatality was afterwards discoverd–want of wholesome water, and

utter want of drainage. という社会的視点をもっていることである。

47～58p は Surgeon in Haddington に当る章であるが，その中で目につくのは次の所である。

The life of a country docter, though varied, becomes monotonous.…… In my case, much of my work was done gratuitously– as is the case with every young country docter. Still I met with a great deal of kindness among the farm-servants as well as among the farmers…… I knew some of these men who were full of sagacity, the result of tresured experimentee-through their income was not more than ten shillings a week.…… Fortunately, goodness dones not belong to any special class, and the best mannered men, among those whom we call the poor. Manner is, after all, the expression of the nature of the man.…… An old saint said, "One little turn of eye sets a man either in the sun or in the shadow of his own body."かくも，Human nature in poor を価値付けると共にそれから多くを学んでいるのである。

66～81p は A Rolling stone gathers no moss と Returns to England-London, Shefield という二つの章にまたがっている。ここではスマイルスがライデンかハイデルベルクの大学で医学博士号を取得して，やがて NEW-WORLD (オーストラリア)に出稼ぎに行こうとするところである。ハヂントンを去るところに，I may add that, before I left Haddinton, I was elected a member of the Town Council, and that, had I waited, I might even have been made a Bailie! But I could not wait any longer. I wanted to make a living; and for that purpose it was necessary for me to look out for some other field of labour. という記事や LEITH から HULL へ向かう航海の困難さ等，詳細な観察がある。この点で特に Return to Englad-London, Shefild の冒頭は注目されよう。Our steamer reached the shores of England on a misty morningin the biginning of September 1838. にはじまる初めてのロンドンの観察は見事な田舎との比較をしている。I need not through the sights I saw puring my first visit to London. But it was not the "Sights" I saw, but the enormous size of London, that impressed me. I had been brough up in a country town where I knew everybody, even the cocks and hens running about the streets. Now I was in a great city of some three millions of people, where I was only a stray unit, knowing nobody. この彼が受けた A new world unlike everything I

had before seen, or even imageined　なるものはやがて都会の異常性を抱くに至る起点でもあった。

90～125p この長い部分はリーズ市における Editer of thereeds times としての生活部分である。特に 103p 以下の Life in LEEDS の記事は見逃せない。まず，I found a great deal of life, industry, and energy among the population of Leeds. Although trade was bad, and they had much misery to contend with, they were anxious to help them selves by all conceavable and rightfull methods. Some thought that politics might help them, other placed their reliance on co-operation. に始まるリーズ市民の生活闘争についての詳述である。その運動について，いま見出しの言葉を紹介すると次のごとくである。

* The Socialist Movement
* Co-operative Societis
* Mr. Cobden Tactics
* The league and Chartists
* R. Cobden's Letter
* Distress in Leeds
* Leagus and Political Parties
* Sir R. Peel's Geverment
* The end of the Riot
* The triumph of the League　などである。

この間の具体的事象を上げてみると，Anti-Cown-Low Movement であり，The Strike 1840 in the manufacturing district である。かくして，リーズにおいては They are really and truly societet for mutual benefit and support. In the cultivation of friendly brotherhood, and in the practice of mutual help, they were admirable as beginnings とか Robert, Owen had been the beginner of the movement であり，The Queen opened Parliament in person on the 3rd of February 1842 であり，Most of the principal town in Lancashire caught the contegion, and all the facutory district became sudden idle. また，They sang Chartist songs, the women were especially excited, the whole-scene remided one of the French Revolution. であった。そうして，I may mention that the cown laws were repealed by the ministry of Sir Robert Peel in June 1846; and that, of the movements above mentioned, the Chartist one collapsed in April 1848, になる

のであった。

やがてスマイルスは I leave political life という章名にもあるように政治から離れていく。そして，リーズ～サースク鉄道会社の書記になるのである。

さて，196～206p は Secretary of The South-Eastarn Railay と A Successful Author at last！という一番華々しいところである。(ここに『自助論』の誕生をも見るのであるが)，彼にとって最初は，It seemed to me a fruitless waste of time と思われた。その時，事件が起ってくる。Meanwhile, my new Board began its operation. A great dreal had to be done to improve matters. The poor South-Eastern seems to have been regarded as a great milch cow, affording sustenance to everybody instead of the proprietors. The number of "Dead head" (as they are called in America) passing along the railway was enormous. Everybody who wanted an advantage, expected it from the railway. The Emperor of the Franch had just made his visit to England with the Empress, and been received at Dover by the South-Eastern magnetes with great ceremony という状態にあった或日の事である。

On the 19th of May the news reached London from Paris, that three large boxes, containing bullion to the value of 14,000, had been robbed on their journey between the two places, and that the weight of the bullion bars had been replaced with shot！This was Frightful news. The board was summoned to consider the matter. という事件であった。

この事件は，Great Gold Robbery…… hints were doropped, but nothing was done. There was no evidence whatever, nor any symptom of evidence. というように迷宮入り寸前になった。ところが，Many months passed, until, towards the end of 1856- after the lapse of more than a year- a young women called at my office, and gave me as Fanny Kay, と，ケイという婦人の来訪を受けて事件は思いがけないほうに進展する。彼女は金塊強盗の一味を知っているという。その情報によって，ポーランドの刑務所で服役中の Edwerd Agar なる男が事件に関与したことを知る。アガーの供述によって Pearse, Tester, Burgess 三人が共犯であることが分る。ついに，Baron Martin at the Central Criminal Couton the 13th Junuary 1857 によって，判決が下された。かくして，Such was the end of the gold Robbery！となったのである。スマイルスは自分の関係したこの事件について，アガーの供述書を用いながら，金塊が Rail way の上下線を如何に使ってなされるのか？また実は，彼が知っていた

MR. TESTER (the assistant-superintendent in the passenger manager's office, to funish him with a certificate of character on his leaving the company, service, to assume the position of General Manager of the Royal Swedish Railway) が如何に強奪に関与するのか？　など推理小説的興味をも引き起こさせる叙述を行っているのである。

277～292p は The North Frisian Islands という章であるが，ここは「フリースランド」諸島への旅行の記事である。それは，スマイルスがイギリス人の祖先を求めての旅でもあった。旅に出る前に，『品性論』(Character, 邦初訳名「西洋品行論」) の原稿を印刷所に入れていた。この書も『自助論』と同様にイギリス人の自主独立精神や進取の気性についても述べたものであるが，こうしたイギリス人への自負心がその祖先への関心となっていったものと思えるのである。

それは，既に行った彼の民俗調査旅行記 "The Huguenots" の出版の考えを変更してまで行おうとしたものであった。ということは To travel about with an object of this sort in view, gives a new interest to a journy. というように今迄の旅行とは異っていた。

さて，Englishman is a mixture of many races- Welsh, French. Dutch, Saxon, Dane, and Norman. と言われる多民族の中で，Where did we get our perseverance, our industry, our inventiveness, our constructivenss, our supremacy in commerce, our love of home, and yet our love of the sea, and of wondering over the face of the earth？　の祖先を追跡しようというルーツを求めての旅であった。このことはジェームズ・ワットなくして蒸気機関の発明がなく，ジョージ・スチブンソンなくして蒸気機関車は無かったのではあるが，そうした産業革命の旗手とは別に，What of the extencive colonisation of North America, and Australasia by a people of constitutional habits. carrying with them certain people come to by and sell; and steamer start daily on their round of the islands. という日常生活者としてのルーツを求めることにあったのである。

まず彼の目は，The country near Husum における farmhouses や warmly clad に及びその集団が the sake of society であることに注目する。やがて，I sailed by the little steamer SYLT from Husum to Fohr, one of the North Friesian islands. に向う。そこで，When the industrious Frisians along the coast found their farms slipping from under them, being washed away by the incoming ocean, and realised that there was a land flowing with milk and honey across the sea,

waiting for settlement and tillage, it is no matter for wonder that they should have taken to their boats with all ther belonging– for they were all sailors as well as farmers– and made for the new territory, for Britain, for the country which afterwards become Angle-land or England. ということを発見していく。

そこで，土地の人が Old dialed を覚えている事を知り，しかも broad Scotch であることを知るのである。また大半がプロテスタントなのに，大島 Nordstrand は a colony of Dutch Roman Cathorics であることや，husbands が出漁中の妻は黒の布で顔を包みまるで尼のように暮していることを見る。更にキリスト教が入る前の俗信仰の跡を訪ねている。やがて Nieblum の教室に入った時，墓碑銘に彼は The Old English names を発見するのであった。

さて，the island of Syld の島名の起源は何であろうか？ スコットランドにまだ保存されている Sild はデンマーク語のニシンからきており，典型的英語の SILT はスカンジナビア語で砂とか泥を意味するところからきたのである。目前にするその島は文字通り泥に囲まれていた。

また，SYLT は SYLT is in the exact, latitude of Yorkshire. Right across the sea lies England with its fertile fields. It was always easy country by sea. for with a sailor people, the sea always offers an easy road. といはれるところであった。彼は二人の人物と話したが，英語で答えながら，As if English was the proper language of sailors！ というのであった。たしかに，The Friasian language has a closer resemblance to the English than to the German. という所であった。

また，Sylt は Ancient monument に満ちた所でもあった。スマイルスには It is still covered by its original mound of earth. とさえ思えるのであった。その後そうした人達の隣人を探してスエーデンに向うのである。Flensborg に船で行き，汽車で Fredericia に行く。それから，Midderlfalt に行き，Gothenborg に船で行って，更に二つの Lake を横切って Stockholm に到着したのである。

この船上で二人のスエーデンの婦人と会う。スマイルスの目はその一人に集中していく。全く世界は狭いのであった。幾つかの会話を交していくうちに，Do you know Tester？ と問うと，彼女は "Ah！ she ejaculated" that was a frightful story. What has become of him？ と驚いた。この会話にある TESTER とは先に紹介した例の金塊強盗の一味であり，彼女は例の強盗の情報を届けた婦人であるが，今や the manager of the Royal Swedish Railway の夫人となっているのであった。

スマイルスの金塊強盗の記事自体，既に述べたごとく推理小説的興味に尽きないものであったが，その後日談として此の部分は更に curious なのである。距離的には Sylt の旅

よりもその後のスエーデン行の方が長いのであるが，その部分の記述は極く少ない。このことは彼の目に映る問題の少なさを物語るであろう。この章の始めに Distance という言葉がある。この「遠さ」というのは実は遠くて近いという（世界は狭い）ことをも示しているのではなかろうか？　またそれは彼の心に懸るものほど近くに感ずるという実態を示してもいよう。

この「遠さ」は「古さ」にも通じるであろう。この章の終りで，a voyoge to Hull over the seas so often crossed by the Norse Vikings long ages ago, I reached my home at Blackheath と述べているのはよくそれを物語っているように思われる。

2．訳者鶴田の翻案と感想

以上がスマイルスの原文に在って，訳者鶴田が省略した主な部分例である。

では次に，鶴田がことさら原文に自らの解釈や感想を付けた部分を指摘してみる。

鶴田訳の「第一章」[8] は「自伝」となっている。この「自伝」という意味について鶴田はいわゆる「嗚呼忠臣」といえば「楠氏之墓」と対応するように，「自助論の著者」といえば「スマイルス翁自身」ということであると言う。つまりこの第一章「自伝」はスマイルスの原自叙伝そのものの意味について解説したものなのである。こうした解説部分を抄訳に附したこと自体が既に問題なのであるが，ここではその形式的意味よりもそこで開陳されている彼の基本的なスマイルス受け止めの思想の指摘に入ることにする。

「第一章」の分量は新書判で12ページばかりであるが，そこに重要な思想的構造が発見される。一つは「スマイルスは我同胞（日本人）の中に沢山の知己があるのを認めソレに対し，頗る士君士風の喜悦を抱いていたものと判断される」[9] というように日本人がスマイルスを『自助論』を通して愛していたと共にスマイルスの方も日本人を理解していたのだという鶴田の発見である。いま一つは，そのようなスマイルスを知ると今更に「その人を愛して，屋上烏に及ぶ」心境になるという。つまり，日本人自体が更にスマイルスの真の世界に入らなければならないという共通感覚への自覚なのである。では，鶴田自身如何なる点でその理解を深めようとしていたであろうか。

鶴田が原文の中から特に引用したのは次の部分であった。

大したものでは無い。覧来るならば，或ル業務を勤め励んだ人，その業務の傍ラ，文筆に耽っていた人の一生涯を叙述したのに過ぎぬ。凡ソ斯様な叙実は，然程，面白いとは謂へ無い。人を驚かすに足るような所業も無いし，人を楽しませるような演劇風の奇変も無いし価千金という位，人の胸を騒がす瞬間も無い。幾十の星霜を一つ一つに打ち過ぎて，

8）上記本（新書判大）　1～13p.
9）同上　6p.

その日その日の活動と，勤務とを完うし，天が命じ給いし範囲内で，自己が及ぶ限りの良績を挙げようと骨折った位の所である[10]。

この部分をいたく感じた鶴田は「余の見る所を以って言うと，その平平凡凡な所に，この自伝の珍とすべき所以が存しているのである。」[11]というのである。

そして，「此の自伝には 自助論などを手にしている人人から観れば，同化して然るべき部分や，同化し得るような部分が少ならかぬ。平平凡凡な生涯を述べたのに過ぎぬとは……之を抄録して，自助論などに付記するがよいと思う。」[12]としているのである。

鶴田のこの「第一章」にみられる受け止めはその後の抄訳中に挿入された「感想」にも反映しているようである。

幾つかその「感想（批評を含む）」部分を取り上げてみる。

訳書 30～32page はスマイルスの父が死んで一家が母の手一つでその生活を支えられていくくだりである。鶴田はこの「母」と自己の経験を重複させて次のように語る。

嘗て「ドイツ」に在った時，本書の抄録者は，自分の柄にも似合わず，誰か有名な人の手になったのを模写したと思わるる一枚の絵を買ったが，ソレには小さな船が描いてあって，その上に，六七歳位のを頭として，総てで四人の児童を守れる一人の老媼を載せ，刈り取って来た秣草を沢山に積み，彼方より吹き寄する風に向いつつ力に任せて竿さす婦人が立っている。コレは，抄録者自身が追懐の料にしようと手に入れたのであるが，今思い合せるとさながらスマイルス一家の母親を描きだしたかのごとくである。……その精神といい，その技量といい，これを何といってしかるべきであろうか。吾が心底に映れるものを，もしや簡単に指して言えといはれたら，「神の如し」の四字を以って之に応ずるより外，用いるべき言葉あるを知らぬ。

「第一章」の天の命ずるままに懸命に生きたスマイルスが実は幼くして，一家の生活を懸命に支えた神のような「母」の姿への共感から作られた事に注目しているのである。

次に訳書 66～67page はスマイルスが医者から新聞の編集人に，更に鉄道会社の書記へと職業を「変え」ていく部分である。

思ふに中学世界に泳いでいる者の中には，執るべき一生の職務を定めようとするに方り，「スマイルス」に類ひする者は，数少なくあるまい。

されば中にはその業務が自己の天や意向と合わなかったため，遂に失敗の地に塗るる者も在るのであろう。……ソコで止むを得ず「変えて，変えて，又変え」た結果，「転ろがりに転がった」結果，……（又）千万の辛酸を嘗め，その刺激的教練を受けた後，ジャガ

10）同上　10p.（原文　347p.）
11）同上　11p.
12）同上　12p.

タラ王と呼ばれるまでに栄達した人もあるやに聞き及んでおる。……いわゆる絶望ということは「ナポレオン」第一世がいわゆる「不能」を見立てたように，我等が一生涯の中から，全く払除けるべきものである。ソンな境遇にたちいたったならば，その時こそは「変えて」みるがよい。……「天下到処有青山」と。ともかくも余はこれを首肯する。……以上の記述を見ると，「スマイルス」も目立ちはせぬが遣ったことは遣った者であると謂わざるを得ない。……「変える」とは試しを為て見るということに外ならないであろう。世渡りはその試しの連続と見て差支いはなかろう。……実物と実際とにぶつかっては我見識の当，不当を検査し，思案し，しい，またまたぶつかって見なければなるまい。学芸中のある実験的研究に取り掛っている最中すらもまた実にそうなのである。

この「変える」ということは，現実状況における「応変性」とか，日常生活における「試行錯誤」的活動を意味するであろう。そうした事態においてでなければ「真実」は有り得ないと鶴田は受け取っているのである。またこのことは，自然科学的な方法（鶴田自身自然科学者であった）の「人生（人文社会科学）」への応用的認識でもあったのである。

この点もまた，「第一章」の普通の日常における旺盛な精神の換起に連なることであった。

いま一つ訳書 211～216page を取上げてみる。ここは『工作家列伝』に続いて『実業家列伝』について紹介した部分であるが，鶴田自身この『実業家列伝』の後半を別に翻訳して出版しているのである。スマイルスはここで，

従来の史伝書類というものは，重に宮廷内の事件だの政治家の行為だの勇士の勲功だのを叙述しているが，しかし，発明家とか，機械製作家とか殊にその勉強，骨折のお蔭で，我々人間文化が，実に美しい進歩を示すに至ったような人人については殆ど少しも留意しない。……コレ等の人人こそ実に社会の安寧を保ちその怡楽を増すに与って，大いに力あったものである。

という。これに対して，鶴田はスマイルスの諸伝記の殊にみるべきところは「いろいろの知識」よりも「貴重な教訓」が得られる点にあるといい，その「貴重な教訓」として，「現今，我国が機械製作等の一般に待つところのものは最とも重く且つ大きく，実に得て量れない。我国をして疾く鞏固の位置に進ましめ，また確乎とこれを保たせようとするには，少なくとも目下の所，殆ど全ったく実業の進歩に依頼しなければならぬのであろう。（この書に挙げてある）人人は皆西洋の「イギリス」に生れたものである。或る人は今日既に，我国を擬するに，東洋の「イギリス」を以ってするがしかしそうなるまでは，条件の一つとして我「マウズレー」や我「アームストロング」ともいうべき人人の現れ出ることを要する。余は天地に祈り，ひたすらその出現を願うものである。」と言う。

ここで鶴田は，前掲の史料に見られる普通の日常の人人，「中等社会」の人達への関心を

より進めている。つまり，現今の「人間文化」の担い手はいわゆる「実業家」であって，宮廷人や政界人や英雄豪傑の類ではないと確信していることである。更にこうした人達の「史伝書類」こそ人生に「貴重な教訓」を与えるものなのであり，この点でスマイルスへの共感を深めているのである。

以上，鶴田がスマイルス『自伝』からことさら強く受け取ったものを指摘したが，この外に例えば次のようなものを付け加えておく。

1) 234page「(フリースランド諸島への旅行に関して) しかし，「スマイルス」のように，本書の読者中，志ある人人は，実地の踏査をして委曲にまでも立入った観察を下し，これを記述して，世に示したなら，至極妙ではあるまい乎。(日本人が)東洋の片隅に在りながら，独力で，英気を世界に発揮しつつ，あるものなのである。小さな島の国民でありながら，その言語が世界中で独特であるように，その動作もまた実に，東洋では独特なのである。」

2) 295page「ソレからまたつくずく思ったが，一国の開進は，実際その中堅たる一級団の手中に存するので，その他の滔々者流は，そのままにして置き，ソレで，今が今の世間状態を支持していくが得策であろうと。」

1) は前述の科学的「実地観察」の精神に通ずる旅行調査の精神にあるが，この精神は文化（特に，言語）の比較による生態学的観察の重要性に注目している部分[13]である。また 2) は「中等社会」への注目が実はそれよりも下の階層の要求や意識に端を発しているよりは，現状肯定的性格をもって受け止められていることを物語っているのである。

3. 鶴田賢次抄訳『スマイルス翁自伝』の意味

1節，2節において，スマイルスの原文の内容とそれを抄訳した部分とカットした部分，更に受け止めた鶴田の受容状況について考察してきた。

では，その間に顕われる特色は思想史上いかなる意味を表しているであろうか。

既に，本稿（Ⅰ）において明治初期の中村正直訳『西国立志編』ではスマイルスへの理解が未だ充分でなく，明治39年の畔上賢造でその原文意を把握するようになった点を指摘した。その際産業社会における「生活」という概念への注目を上げたのであった。しかも，それが日本における産業革命の進行とほぼ時を同じくして明治20～30年代にあったことをも考え合わした。また，本稿（Ⅱ）[14] はそうした時期に既に社会主義運動が始まるがそこ

13) 原文275p. The North Frisian Island で，島の蒸気船の船長の言葉をドイツ語にも似ず，フリーシアン語にも似ず，アングロサクソンと呼ばれているものに近い，と受け止めたり，教会の墓碑銘から，英国人の名前を引き出したり，集ってくる船乗り達の言葉に英語が如何に広くひろがっているかを発見していく等等である。

14) Artes Liberales 32 July 1983

でもスマイルス流の「中等階級」への注目が顕れていて，個人の自助，自立に賛意が示めされていたのであった。

このことは今，スマイルスの『自叙伝』の原文意と照らし合わしても合致する性格であって，その指摘の妥当性を裏づけるに足るものである。しかも，時をほぼ同じくしてなされた鶴田賢治の『自伝』翻訳ではそうした傾向をこれまた反映していたのである。そこで受け止められた産業社会における担い手の認識や新しい価値意識，更にはそれへの方法が自覚されていたのである。

特に，鶴田が平凡な日常生活人の自立への営為に注目し，しかもそれを「神(天)」の命として受け止める態度を表明したことは，拙稿「S．スマイルス『セルフヘルプ』と独歩『非凡なる凡人』」[15]で指摘した「平凡人の（時代的）意識」とも対応して，彼の的確な把握であったことが考えられるのである。

しかし，スマイルスの原文意から鶴田がカットした部分や軽視した部分にみられるその受容傾向は看過できないものがあるように思えるのである。

まず，原文にある「政治的社会的」記述への態度である。この点について，鶴田は例えば，前述したように，新聞編集人として政治運動に奔走したスマイルスについて「抄訳」本の制約上省略せざるを得ないといった。しかし，これら政治的社会的問題の記述はその編集人時代のみでなく前半生を覆っている問題のカットであり，訳書の量的制約よりも鶴田個人の（あるいは彼を取り巻いていた社会の）制約を物語っていたように思えるのである。

鶴田という人の個人史は詳しくは分らないが，彼が東京帝国大学で物理学を専攻し，後に同大学で教鞭をとった日本人として近代自然科学の自立型人物の典型に属したことは明確である[16]。

中山茂氏に依れば，かかる帝大科学者は「新興国日本の方向づけを意欲する国士ナショナリスト初代と違い科学のための科学を奉ずる職業人となる」と評されいる[17]。

つまり，政治社会的問題と講座制下の学問研究や教育の意識とが分けられてきたのである。鶴田がスマイルスから近代科学の方法や精神などを受け止め，産業革命の進行による実業社会の生活に注目したのもこの点にあった。しかし，その事は学問による自立といっても学者や教育者の自立にかかわることで，今や産業社会が生みだしている新しい生活人（都市労働者や大衆）の自立には直接関係していたのではなかった。

15）『文芸研究　102集』　日本文芸研究会（東北大学）　昭和58年1月。

16）例えば，平凡社『人名辞典』では明治1、1868～大正7，1918。明治大正期の物理学者。明治23年東京帝国理科大学卒業。明治26年同大学助教授。明治33年熱力学研究で理学博士号を受ける。明治32年ドイツ，オランダに留学。帰国後電気の研究に入る。等とある。

17）「第十一章　科学技術の分化と発展」『体系日本史叢書　19　科学史』　山川出版社　昭和42　413p.

従って，例え彼が日常生活における観察や「実地調査」などの方法を重視しても，そのことが即対象である「生活人」の意味と同一なものとしての次元で受け止められたか否かは疑問なのである。彼が「一国の開進は実際その中堅たる一級団の手中にある」といい，「その他の滔々者流はそのままにしておき……今の世間状態はそのままにしておき」という時，それは如実に物語られるのであった。

彼が，1830年代のヨーロッパにおける REFORM の嵐をさして注目しなかったのも，また社会的事件や犯罪に関して煩雑を理由に一切触れなかったのも当然といえば当然のことであった。

しかし，こうした鶴田の個人的理由ばかりではなく多分に当時の時代的状況によっても制約されていたと考えられる。

鶴田の抄訳が出版されたのは明治41年12月29日であった。この年の10月13日には有名な『戊申詔書』が国民に下されている。

『戊申詔書』と『自助論』とは深い関係にあるように思える。それは詔書の本文を一読すれば容易に判明する。以下その個所を指摘してみたい。

……方今人文日ニ就リ月ニ将ミ東西相ヨリ彼此相済シ以ツテソノ福利ヲ共ニス　朕ハココニ益々国交ヲ修メ友義ヲ惇シ列国ト輿ニ永ク其ノ慶ニ頼ムコトヲ期ス……宜ク上下信ヲ一ニシ忠実業ニ服シ勤倹ヲ修メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ実ニ就キ荒怠相戒メ自彊息マザルヘシ……[18]

ここでは，明らかに大日本帝国が『五箇条之御誓文』(明治１）の「上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フベシ」とか「知識ヲ世界ニ求メ大イニ皇基ヲ振起スベシ」[19] という段階を超え更に『教育勅語』(明治23）の「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ恭倹己ヲ持シ博愛衆ニ及ボシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以ツテ知能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ広メ世務ヲ開キ……」[20] という時代状況をも超えて国民の自立を要請しているのである。

つまり，「忠実業ヘ服シ勤倹産ヲ修メ……華ヲ去リ実ニ就キ」とは既に述べてきた日本における産業革命の進展に応じた実業社会人としての自覚を要請したものである。しかもこの文の頭に「上下心ヲ一ニシテ」とあるのは，工場に鉱山に争議，暴動が相いいできた状況や農村における地主，小作の関係に動揺を来たしている現状を見た政府が[21]，国民精神の再編強化を期待し（その後大正12年には「国民精神作興に関する詔書」[22]が出される）天皇の名において国民に「生活」のあり方を示したのである。“私”の「自助」の徳目であ

18）『日本精神叢書　１』　教学局　昭和15年　93～94p.
19）同上書　51～52p.
20）同上書　89～90p.
21）隅谷三喜男編『大日本帝国の試練』　中央公論社　昭和41　345p.
22）『日本精神叢書　１』　98～99p.

った「実業」「勤倹」「学問」「自彊」等が帝国の国民生活として全て包含されて強調されたのである。

この詔書が『軍人勅諭』や『教育勅語』と根本的に違う点はこれが軍人や学校という特定の対象ではなく初めて国民全体にたいしての「生活規範」が示めされた点にあるといわれている[23]。ということは国民の「生活」が一応形成されてきて，それを政治権力が新に包含の対象としてきたということにもなるのである。既に指摘したように，スマイルスはそのもっている真意が日本における「生活」[24] の成立時期において受け取られるとしたが，それはこの点でも実証されるのである。つまり，スマイルスはこの段階において再び日本人に強烈な機能を発揮することになったのである。鶴田の抄訳はかかる精神史上に置かれていたと言えるのである。

鶴田が1830年代のイギリスにおける産業革命以後の諸改革，例えば「選挙法改正案」の議会提出や地主に有利な「穀物法」の撤廃等にさしたる関心を示めさなかったのも彼の意識が『戊申詔書』的自立を基本にしていたからであると考えられる。このことは彼が西洋におけるイギリスと同様に東洋における日本を強く意識しても，やがて現われてくる日本における選挙法改革運動たる大正の普通選挙権獲得運動や小作争議にみる自作農の自立への動きは把握できなかったことをも示すであろう。

と共に，このことは彼が「人間文化」は「実業社会人」によって担われていると把握しても，又「自伝」が宮廷的記事や英雄的記事でなく日常における工作者の伝記にこそ価値があるとしても，新しく起ってくる次のような動きには予想がたたなかったのではあるまいかと思わせる。

例えば，歴史教育においては，「社会の発展の理法を経験的に理解させることに主眼をおき，そのため社会発展の動力となる経済生活や産業生活を重視し，生活問題を解決させるために人類はいかに考えたか」を教育するという動き[25]。「自らを捧げて日日の用を務るもの，倦むことなく現実の世に働くもの，健康と満足とのうちにこの日を暮すもの，誰もの生活に幸福を贈ろうと志すもの，それらの慎ましい器の一生に，美が包まれるとは驚くべきことがらではないか」[26] という「民芸の美」の発見にそれを作った人類の生活の意味をみる動き等である。

スマイルスの原文にはいたる所にかかる点が意識されているのである。例えば，鶴田が東洋における日本の言語を比較研究したら如何に，と提案させた所の「フリージアン諸島

23）同上隅谷著　346p.
24）ここで「生活」というのは本稿（Ⅰ）Artes Liberales 31 に述べたように Life が「生活」という訳語でなければ，概念を表し得ないという明確な思想表現をもってきた時期をさしている。
25）今井清一編『大正デモクラシー』　中央公論社　昭和41　267p.
26）柳宗悦「雑器の美」『現代日本思想大系　30』　筑摩書房　1964　228p.

旅行」の記事は，英国人の起源を求めたスマイルスがその方法として，言語の比較から民族を考察しているのである。しかし，そこでスマイルスの目に写っているのはフリージアン諸島で生活している人達の生活の実態であり，彼等が生活の中で如何なる民俗品[27]を作成しその意味は何であるのかを問うことなのである。

しかも，そうした民俗品の美が発見され，コレクションも作られていることをも報告しているのである。(なお，かかるスマイルスの原文の翻訳は別の機会に公表する予定である。)

こうしたスマイルスの観察眼は彼個人の生い立ちと彼を取り巻くイギリス社会の伝統的な感覚によって支えられていたように考えられる。

スマイルスは自分の生い立ちについて特に「自分が一生の中，非常に仕合せだったと思うのは身体の非常に強健であったことである。……イキイキとした生活は運動からくるのである。田舎住いをしていたということもまた一ツの仕合せなのであった。……田舎特有なステキのことをも観察することができたのである。」[28]と言う。この「田舎住い」の中で母の次の姿を見逃してはならないであろう。「余の母は暇さえあればいつも糸車を廻しておられた。ソレでもって家内全体のリンネルを不足ないように，また殊に，娘共の支度をも充分に調えようと心懸けられたのである。」[29]いわば「手作り」の精神が彼の家庭にはあったのであり，それを彼も何時までも保持したのである。

(彼の伝記にはいたる所に素晴らしい自然の描写がある。これも「田舎育ち」とその目に深く関係しているものと考えられる。)

スマイルスの思想がイギリス産業革命を支えた近代科学主義（近代化路線）にあったことは言うまでもないことであるが，その反面に以上の如き自然，田園主義が強く存在していることを見逃してはならないであろう。

この相反する二つの性格はスマイルス個人の二重性格であるよりも，19世紀イギリス社会の性格でもあったのではなかろうか。

ちなみに，Martin J. Wiener の近著 ENGLISH CULTURE AND THE DECLINE OF THE INDUST RIAL SPIRIT, 1850～1980[30] によると，「英国では，物質的，科学技術的発展に対するこの疑惑が……産業革命の進行中に表れ，新しい社会の確立と共に，消えるどころか，かえって強まり，広がった。」[31]と言う。著者ウイーナはことさらこの「反近代

27) 例えば，捕鯨に出掛る島の男達は船に木材を積みこみ，長い航海の退屈さを愛しい妻や愛人の為に彫刻をして持帰りプレゼントするのである。それは日常生活の中に溶け込んだ机や椅子の装飾でもあった。
28) 上記抄訳本　20～21p.
29) 同上　15～16p.
30) 原　剛訳『英国産業精神の衰退』　頸草書房　昭和59
31) 同上　6p.

主義（機械，工場に対する田園・狩猟）の流れ」を強調しているが，イギリスの産業革新の反面にいま一つの強固な思想が存在したことは否めないであろう。もっとも，ここではスマイルスは二個所に引用されている[32]が，共に彼によって否定されるイギリスの産業技術主義者の例証としてである。

スマイルスには明きらかにイギリスの精神的伝統の二つの性格が在ったのである。そしてこの二つが融合しているところにその特色が在ったのである。このように考えると，ここに指摘したスマイルスの真意は日本に於ては大正期以後の課題[33]を持つものでもあって，その限り鶴田の受け止めはやはり明治時代的制約下に在ったと言えるのではあるまいか。

32）同上　一つは 46p，いま一つは 71p である。前者は『技術者の生涯』から産業技術の専門家は英国の原動力であるとした所を，後者は英国の産業技術は若く，いま始まったばかりだという所を引用している。

33）なお，このスマイルスの思想と大正期以後の日本における受容の諸問題については，同じく S. Smiles の Life & Labour（1887）についての拙論（『大畑荘一教授退官記念論文集』掲載予定）で考察したいと思っている。